

海女集落の形成過程にみる ジェンダー秩序の形成

— 伊豆白浜における海女労働の分析から —

齋 藤 典 子

本論の舞台となる静岡県下田市白浜は、明治30年代～昭和40年代初期までのおよそ70年間にわたり、テングサ漁が一村の経済を支えた村である。さらに、テングサ漁の利益を村民に平等分配する慣行から「原始共産性」の村と呼ばれ、多くの研究者の関心を集めてきた。しかし、その研究の多くは、テングサ労働が性別役割分業に立脚し、稼ぎ手の中心が海女を中心とする女性労働であることを見落としてきた。つまり、「平等分配」を可能にしたのは、女性労働の収奪が容易にできたからに他ならない。

本論は、日本社会に現在でも根深く残る市場労働における性別役割分業が富の分配や受益権利の男女格差を生み出す構造的原因の一つであるというジェンダーパースペクティブの上に立つものである。その上で、経済的優位性が明白な海女労働がなぜ収奪されたのか、そして、収奪を可能にしてきたジェンダー秩序とはどのようなものなのかについて論じるものである。

本論のキーワード

性別役割分業、収奪構造、階層、ジェンダー秩序、ジェンダーハビトゥス

序章

女性を排除する理由として、「女性は不浄だ」とする生理的特質に由来する言説が古から、世界各地で使われてきた。例えば、タイでは、この言説が「女性は出家しても正式な仏教僧になれない」という仏教慣習に形を変えて今も残る。小野澤は「仏教教義上、存在しなかった言説を論拠に、経済基盤を持たない僧侶たちが、男性と女性を聖俗に序列化することで、自己利益を守ろうとした」（小野澤：1995）^(注1) とする。つまり、女性忌避のタブーを成立させて、女性を劣位に置くことで、ジェンダーによる差別を誕生させたわけである。

ヒエラルキーを形成するためには、意識的にハビトゥス=habitus^(注2)が作り上げられる。そしてそれに基づいて伝統、慣習、制度などが構築される過程で差別構造が徐々に形成されていくのである。差別の構造は、初めから構造化されているのではなく、構造化されていく。構造化は人々の実践によって維持されるのであるが、その実践は構造によって構造化されたハビトゥスに基礎づけられる。(江原2001:74)

筆者は、永年、男性支配を支え、維持する「ジェンダー秩序」^(注3)と、それを基礎づけるハビトゥスに関心を抱いてきた。本論の目的は、男性、女性間に存在する性支配構造の解明である。性支配を産出する社会的実践のパターンであるジェンダー秩序がどのような過程を経て構造化されてきたのかを、海女労働を通して分析するものである。

現在、労働とジェンダーを巡る議論には、大きく分けて二つある。一つは、無償労働である家事労働や家内労働が女性を抑圧する問題であり、二つめは、市場労働における男女間格差の問題である。本論では特に後者に着目した。なぜなら、市場労働において、男性による女性排除の結果、女性は常に周辺化を強いられてきたからである。それは上野(1990)や大沢(1994)の「産業社会への“家父長制的戦略”」^(注4)の導入が、男性による女性支配と女性の男性への従属システムの形成に繋がった」という議論である。とりわけ本論で海女労働に着目した理由は、海女労働が男性に従属した働きではない点にある。一般社会と異なり、女性労働が中心の社会においての「ジェンダー秩序」と、その再生産の構造を解き明かすことで、より、その実態が明かになると考えた。

第1章 先行研究の問題点と本論の視座

日本の海女を扱った研究の多くは、志摩や房総半島の民俗学調査が中心で、海女労働の分析はほとんどされてこなかった。

一方白浜村は、テングサ採取の利益配当金を村民に平等分配したことから、「原始共産制の村」(潮見:1954:47)として、研究者の関心を集めてきた。しかし、潮見の論文には、海女労働に関する記載は極めて少ない。少なくとも潮見にとって、白浜の社会構造を分析する上で、海女労働に対する関心は全くなかったとみるべきであろう。

しかし、潮見は、「原始共産制の村」に搾取構造が存在していることには注目

しており、強制的裏付けは、専用漁業権としての村持ち入会い漁場である」（潮見:1954:60）と、結論付けている。しかし、搾取を可能にした根拠は、専用漁業権だけではないはずである。そこで、筆者は、「原始共産制の村」の分析に、テングサ労働者と経営者間のヒエラルキーの分析、そして、性別役割分業から生じる男性による女性労働の搾取といったジェンダー視点の導入を行った。

労働研究において、国内の魚家の女性労働を扱ったものは、ほとんどない。一方、農家の女性労働研究で千葉悦子は、農民家族の労働編成のあり方を検討することで、ジェンダー間分業の存在をつかみ、それがどのようにして形成されたのかイデオロギーの側面から迫る」（千葉:2000:86-123）という分析枠組みを提示している。

このようにジェンダーイデオロギー（言説）に着目した研究は多いが、果たして言説だけで人の行動は決定付けられるだろうか。ブルデューが言うように「言語ハビトゥスが状況にぴったり合う言説を生産するため、状況が変わることで当然、言説は変わっていく」（田原:1991:154）のである。そして、「ジェンダー秩序」は、言説が問題なのではなく、それを生み出す構造に規定されたハビトゥスの方に問題があると筆者は考える。

第2章 調査地域の概要と社会構造

2.1 白浜の地理的概要と産業

白浜は、伊豆半島東南端、下田市の北方約4 kmに位置する相模灘に面した農村である。山地と海岸の間にわずかな平地が見られるだけである。相模灘に面す海域は、かつてテングサの豊富な漁場であった起伏の多い海底が広がる。白浜は海岸に平行に走る国道135号線沿いに北から板戸、長田、原田（人口2440人、879世帯）の3つの集落からなる（1999年）。そして、昭和30年（1955年）下田町に合併されるまで一行政村をなしていた。下田町は昭和46年（1971年）に市制を施行した。

1961年、それまで自動車交通と海上交通に頼っていた東伊豆地域に伊豆急行が開通した。3時間足らずで東京との往来が可能となり、白浜は大きく様変わりした。昭和40年代、美しい自然を目当てに東京資本のリゾートホテルが進出、地元民もこぞって民宿経営などの第三次産業へと、移行したのである。2000年、白浜地区内人口の69%が第三次産業に従事、農業従事者は3.9%、漁業従事者は2.6%

である。昭和20年代には、250名近く居た海女も2000年には、わずか5名であった。

一方、テングサ漁で沸き返った昭和23年当時の白浜村の主産業は、農業、採藻業、漁業、炭焼き業であり、その大半は、5反未満の零細自作農であった。つまり、白浜村は相模灘に面しながら農村であり、近隣の漁村、須崎地区とは、その性質を大きく異にする。

さて、零細農村地帯であった白浜の経済を明治期から昭和30年代まで活性化させていたのが農家の副業として行われていたテングサ漁である。この時代、伊豆半島全体で全国の40%近くを生産していた。中でも白浜村は、「スカリが乾けば、銭が渴く」と言われたように最主要生産地であった。

2.2 白浜の テングサと村民との関係史

白浜には、村が編纂したテングサ関係の資史料が数種類ある。そこには、“共有資源”であるテングサをめぐる村民と施政者との駆け引きが如実に現れている。

江戸時代（1757年から1821年まで）には、村民が採藻益金を代官に上納することで採収権を獲得し、テングサを畑の肥料として使っていた。1822年、白浜村は水野出羽守に支配代官が変わったことを機に旗本小笠原領として、葦山の代官所も支配に加わり、水野出羽守と石高も半分、戸数も半分ずつに分割された。そしてそれまで村民に認められていた海面使用权も認められなくなり、出羽守の御手浦としてテングサは採収され、水野氏の手で、寒天原料として大阪地方へ販売された。テングサを肥料として使えなくなった白浜村民は、肥料代として年間、30両を幕府より貰い、水田の持高に応じた「高割」という形で分配した。

明治5年（1872）より明治22年（1889）までは、税金を払うことで、村が地先海面使用权を静岡県より認められた。そして、明治41年（1908）から昭和24年（1949）まで専用漁業権によって『白浜村テングサ漁業取締条例』の下、テングサは村営で採収された。

戦後の昭和24年（1949）に漁業制度の改革が行われた。この制度の目的は、漁業者を主体とした漁業経営を目指すものであったが、異例にも村に共同漁業権が下り、採取・販売権は白浜村に継続された。

昭和30年、白浜村の下田町への合併にともない、白浜村は共同漁業権を放棄した。以後、テングサ漁業権は、昭和45年の下田市内6漁協の合併で下田市漁業協同組合に引き継がれている。

テングサ漁をめぐる歴史を振り返ると、白浜地先の海は、江戸幕府管轄の「な

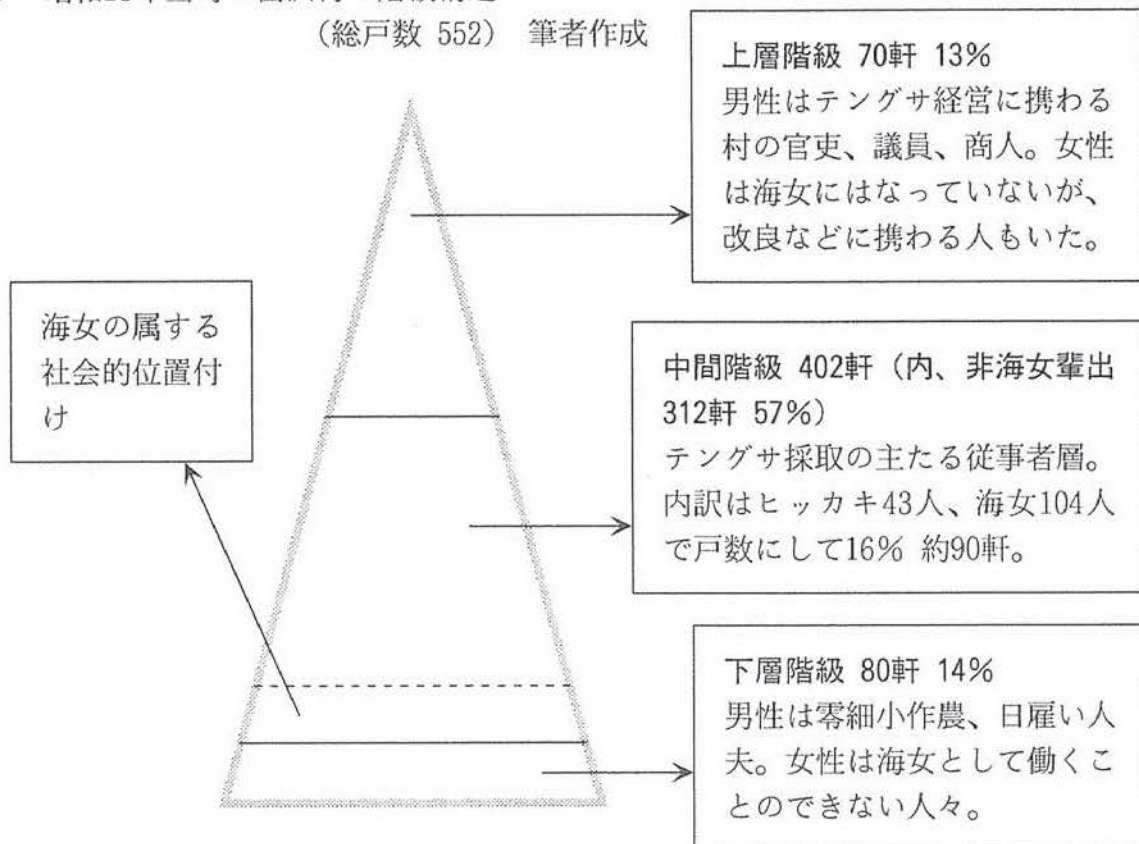
わばり」^(注5)として、資源利用が図られていた。つまり複数の個人や集団が一定の領域において資源を共同で利用する「入会い」とは明らかに異なっていた。それは、幕府権力によって、資源が奪取されていたことを意味する。この体制は、明治になると幕府から県へと委譲され、そして村へと引き継がれるのである。

2.3 白浜村の階層構造

白浜村のテングサ関連の史料には、「原始共産制の村」と書かれたものが多い。これは昭和30年にテングサ漁業権が白浜漁業協同組合に移管されるまでの通算57年に渡り、テングサ採取が村営で行われ、利益を村民に平等に分配したことから来る表現である。私の調査でも当初は、白浜は貧富の差のない村であったかのような「白浜の女はみんな潜ったよ。ここでは、そんなに豪勢な屋敷も見当たらなかった」といった語りが多く聞かれ、その階層構造がわかりにくかった。しかし、調査をすすめる中で、「白浜村の女性が全て海女になったわけではない。海女を出さない家もあった」という話を得られ、海女を輩出した家と非輩出の家が、区分されていることが明らかになった。白浜村の階層構造を図式化したのが図1である。

図1 昭和23年当時の白浜村の階級構造

(総戸数 552) 筆者作成



明治以降、商才に長けた家が経済的に豊かになり^(註6)、上層階級へと変わっていった。そのような家では海女を出していない。ただし、テングサに関する仕事は様々あり、年寄りや海女に不向きな女性の仕事もあったため、“小遣い稼ぎ”や“情報交換の場”として、上層階級に属する女性達も加わっていた。

白浜村の階層構造をみると、江戸時代後期、名主を出す家柄は決まっていた。しかし、所有する田は3反ほどの為、名主の条件はテングサ採取船やイカ釣り船を建造できる「船もち」ではなかったかと、郷土史研究家のSは語る。また、白浜には他の漁村に見られるような「網元」はいなかったという。なぜならば、白浜では網漁がほとんど行われなかったからである。しかも、明治30年頃までは、テングサ採取船やイカ釣り船を建造することは嚴重に制限されていた。その背景には、テングサ漁獲量の競争を避けるための支配層の独占行為がある。また、「水夫（カコ）」の家も世襲であったが、船もちとカコとの間には、支配服従関係はなかったといわれる（潮見1954:50）。船が自由に造れるようになったのは、テングサのヒッカキ漁法が盛んになりだした明治末期からである。また、戦後の昭和23年頃の土地持ちは、田4町歩、畑1町歩、山林50町歩を持つ「井戸端」を筆頭に10数軒が数えられた。そして商人、旅館などの70軒の富裕層と、土地を全く持たない零細小作農や日雇い人夫などの約80軒の貧困層から成っていた。

事例 1.

海女H：財産のえらい家の人っちは、私ら貧乏人とは話もできないような風だったな。各丈（屋号）の母ちゃんなんか私らと雑談もしなかった。なのにそんな人にまでテングサの配当金くれるんだからな。

海女I：おダイヤ（金持ちの意味）の人はさ、ちいっと子供がゆうこときかないとすぐ『カツギ（海女）にさせるんぞ』言っただよ。あの人らにとってカツギは惨めで最低の生活だと思ったんら。

海女T：昔はね『スカリが乾けば、銭が渴く』って言ったものだ。スカリが乾くとお金が無くなるっていう意味ですよ。沖に従事しない人は、別に何か働いているでしょ、だからそう言って、潜る人を笑っているの。ただで、配当を貰う人は潜る人をバカにしていたね。

事例1からも昭和20年代の白浜の階層区分は明確であり、海女は社会からどのように位置付け（図1の下から2番目に位置）られていたかを明確に認識していたことになる。海女は潜りに関係しない村民からバカにされているのに、利益配当が富裕層にまでも分配されることに不満を持っていたことは明らかである。

第3章 テングサ労働と性別役割

3.1 テングサ労働における性別職務分離

白浜におけるテングサ漁は、その採取から出荷に至る行程において、以下に述べるように完全な性別役割分業を行ってきた。

① テングサを海から採取する仕事

操業形態によって、男女役割が変化する。海女の女性が主となり、男性が従となって採取する方法として、オカカツギ、船カツギ、面スイがある。一方、男性が主となり、女性が従となって採取する方法にヒッカキがある。

オカカツギは、海女が一人で岸から樽などの浮材を持って泳ぎ、潜水する方法である。樽の下に「スカリ」と呼ぶ、網の袋を吊るし、採取物を入れる。スカリには70kg～100kg程のテングサが入る。1回平均40～50秒間、10m前後まで潜水する。海面に浮き上がる毎に、スカリにテングサを移す。作業時間は5時間程度である。オカカツギは、夫が勤め人や農業従事など男性の助けを得られない女性が行った。

船カツギは、男性の漕ぐ1トン程の小船で水深の深い漁場まで行く。そこから海女が錘（16kg程度）を持って潜り、テングサを取る。海底に着くと海女は錘から離れてテングサを取り、スカリに入れる。1回の潜水時間はオカカツギと同じ40～50秒間で、水深20mぐらいの所を1日に70回～80回潜る。海女は、息が苦しくなると上にいるトマイに合図をし、トマイが滑車を使って引き上げる。男性の仕事であるトマイは、櫓で船を漕ぐ他は、船上で海女やテングサを引き上げたり、風向や潮流に気を配る。船カツギは、夫婦や親族で操業する場合が多い。

面スイ（簡易潜水器方式）は、コンプレッサーからホースで空気をマスクに送ることで、長時間、海底に潜ることができる方法である。昭和40年代急速に普及し、潜水深度は20m～30mである。2、3時間は続けて潜れるため、生産性は4、5倍上がった。

ヒッカキ 竹で作った櫛状の熊手のような道具を船の左右、後尾に付けて、帆に溜めた風の力を利用して曳く。海底のテングサを根こそぎ採取できる。男性が主に従事し、女性は船に同乗しテングサを引き上げる手伝いをしたが水分を吸ったテングサを引き上げる労力は重労働であった。

② 掛け取り作業

採取したテングサを選別し、籠に入れ、塩抜き、計量場までの運搬は、採取し

た海女の仕事。計量及び記帳は、村営のテングサ事務所に勤める 男性が従事。

③ テングサを干し、裏返す、倉庫に保管する作業

年配の女性や海女に向かない女性が「改良員」として、村に雇用されていた。

④ テングサを種別を選び、ゴミなどの付着物を除去後、「マル」を作る作業

「マル」とは、干して乾燥させたテングサを種類別を選別した後、一斗樽に入れ、上から「改良」及び「常用」と呼ばれる女性が踏み固める。それを2樽分合わせて 50kgの円柱状の形状に縄かけをして、出荷しやすいようにする作業。

⑤ テングサの売買、収益金の算出等、経理、運営業務

テングサ事務所の「総務員」と呼ばれる役場の幹部候補生の男性が従事した。

⑥ 総責任者

村長が総括し、助役が各テングサ事務所の管理、事務処理を任された。

3.2 家族経営としてのテングサ労働とジェンダー

前述のように、白浜のテングサ漁はジェンダー間で職務分離が行われていた。しかも、従事者の60～75%（昭和25年当時）が夫婦や親戚などの家族単位で行われていたことに大きな特徴がある。すなわち、白浜のテングサ漁は家族経営の上に成立していたのである。しかし、「機械を基軸とした男性労働の補完的役割を女性にさせるといったジェンダー的編成が農民男女間に「従属的労働関係」を生み出した」（千葉2000：86-123）とするジェンダーパターンとは全く違った展開が見られる。「面スイ」を導入したのも生産性の向上と海女労働の軽減化（呼吸を楽にするための導入であった）を狙ったもので、目に見える形で機械化が男女間に「従属的労働関係」を招かなかったのである。それより、「面スイになって男は大変さ、船を操ったり、人間みたりするからさ。女は息ができるから楽だけどホースをうまく捻らねえように、男は操作するから容易ではないって言うの」と海女Oが語るように、機械化により、男性労働の比重も重くなった。なぜなら生産性は機械化により、4～5倍アップされたからである。

事例2 肩身がせまくて 結婚1年後に海女になった話

海女Hは大正12年、白浜の板戸で生まれた。現在79歳（平成14年現在）。68歳まで海に潜った。実家は兼業農家で、両親はHに畑を任せ、シーズン中は船カツギをやっていた。Hは、当時の白浜の子供としては、平均的な10年の学校教育を受けた。白浜の女性は結婚前にカツギをやっていた人はほとんどいない。結婚は、21歳の時にした。相手は、結婚と同時に東京の勤め先を辞めて下田の造船所に勤めた。夫は結局、そのまま定年まで、サラリーマンとして勤め上げた。

結婚当時をHは「海へも行ったよ。磯もの採りにさ。姑さんが行ったからさ。浜には船でテングサを山程採ってきた家の家族が5、6人と手伝いに行ったら、テングサを選ったりしてるんさ。だから見られるのがやだくて、長屋の隅々を隠れちゃ帰って来たもんだよ。一人前の事をやれてないから、肩身が狭かったね」と回想する。海女の仕事をしなくても、近所の人に非難されるのではないかという思惑を気にした発言である。

カツギをやり出したのは結婚して2年目からだ。「やらざらに、こんな事ぐらい、人がやるだもの私もやるだにと、周囲がやり出すもんで、やらなきゃならなくなるの。どうしても世間体が悪くて。嫁に来た頃は、他に何にもしてなくても白浜ではテングサの配当金で喰えたから」という。

Hは潜りの方法を先輩海女から見よう見まねで覚えた。そして結局、45年間、1人でできるオカカツギをしてきた。また休日は、夫が農作業をし、Hはカツギが休みの雨の日に行った。「カツギは、陸では体を休めて、慎重くしてなきゃだめだよ。海の底へ行ってもせつなくて採れないの。だけど、私はずっと働きっぱなしだよ。

昭和36年、伊豆急行の開通後、都会から若者が押し寄せてきた。そこでH家でも昭和43年に民宿を始めた。その理由を「現金がその日その日に入るからね」と語る。10日ごとに漁協を通して労働報酬が入る海女の仕事に比べ、日銭が入る民宿は、海女達にも魅力的であった。しかし、「海女の仕事は女の稼ぎにしてはいかかったよ。給料取りの男以上に稼いだから」と言う。つまり、漁協を通すことは夫や「家」への入金を意味し、海女本人が直接、現金を手にするわけではない。

事例3「白浜の女は奴隷だった」と語るトマイ(船の漕ぎ手)

民宿を経営するIは大正15年、白浜の板戸で生まれた。現在、76歳。父親が早世したため、母親が海女をして、生計を立てた。終戦後、兵役から戻ったIは、母親のトマイを6年、結婚してからは、ヒッカキを5年、自分自身が面スイを3年行った。そして、昭和37年からは、妻と近隣の海女を乗せ、面スイのトマイを昭和40年代まで続けてきた。その後、民宿経営に乗り出し、地元民宿協会の東京事務所長や漁業協同組合の役員を務めたりと、高度成長時代の白浜の顔役の一人でもある。

「白浜の女は苦労したですよ。ハッキリ言えば女は奴隷だったね。女が海へ潜って、男が上にいる。だが、男だって遊んでいたわけじゃあない。昭和45年頃は、貝採りで1日に40～50万円になった。そういう時代が10数年続いたよ。だから家が建ったですよ。ここでは、女衆が働かなければ金持ちにならなかった」。

「昭和32年、ダッコチャン(ウェットスーツ)ができたと同時に、近隣では面スイ装置が使われ出した。それで、『白浜でもやろう』と言ったところ、反対を喰ったわけですよ。理由は、生産性を高めるのは分かるが、共存共栄でやってきたのだから、(機械を導入できる者の)強い者勝ちはおかしいという意見だった。技術革新は、従来の慣習を破らなくてはならないから、どうしてもぶつかる。それで漁協青壮年部を作って、男が先にやってみようじゃないかと、男が潜り、逆に女が上にいる方式でやってみたですよ。昭和37年頃から3年間続いたです。結局、男はずるいんで、また、女が潜るようになったですがね」。

3.3 海女のイエと外における地位

事例 4

「白浜では、女がいかに頑健な身体を持ち、テングサ採りがうまくできるかで、その家の経済を左右しました。そしてかつて白浜のテングサ経済は、女性の力によって成立していました」。

「カツギをやると神様みたいに、御飯の支度も姑さんがやってくれたですよ。4人の子供は皆、大ばあさんがみてくれたし」。

「昔、言ったもんだよ『縄地男に白浜女』って。白浜は女が強い。縄地は男が強いってことだよ。縄地には鉾山があったから、そこで働く男は強かった。海に近い所は女が強いものだよ。だって、女が潜ったんだもの。テングサの利益配当になんてどこできめたのか、全く聞かずにきたね。男がみんな決めてくれた。女は、男に従ってきただけだ」。

事例でも分かるように海女のイエでの地位は、その経済力により、一様に高かった。その点が「家制度にしばられてきた農家女性」(千葉2000:86-123)とは、大きく違う点である。では、海女労働が村の経済まで左右するような状況下において、地域社会の中で女性達は、どのように扱われてきたのだろうか。

テングサ事務所員であったKは「テングサ経営に関して、村内で海女たちが発言する機会なかった。ヒッカキは、その家の親父さんが労働の主体だし、船カツギの場合、女の人が主体だけれども、経済の主体は親父さんなので、寄り合いには親父さんがやってくる。女性はあくまでも、男に従属するものであったから。」と語る。

つまり、夫婦協働であってもテングサ漁についての生産価格の交渉や採取のきまり作りは必然的に男性によって決められていく仕組みであった。そこに、海女たちの団結心や戦略、才覚といったエンパワーする力は生まれてこなかったのである。

第4章 テングサ漁業の運営形態と利益分配

4.1 白浜村におけるテングサ利益の分配方法の変遷

テングサ利益を村民に「平等割」した背景には、利益配当を巡る争議の歴史がある。争点は、明治以後もテングサ利益を江戸時代同様、田畑の所有面積に準じて分配したことにある。そこで生産者達がテングサ労働の対価に応じた分配を求めたのである。その結果、明治38年の規定では、村民平等割60%、基本財産積立

て20%^(注6)、村の一般会計20%になった。それが昭和5年には、平等割が80%になり、また昭和10年からは、収益金の全額を平等割^(注7)することになったのである。そして、昭和27年の分配割合は、生産者割戻金30%、一般配当金30%である。つまり、テングサ採取者への利益還元金と、村民に分配する一搬配当金の率が同額である。

「白浜の平等割」は、実はテングサ採取労働者の搾取構造の上に立脚しながら、昭和30年まで続いたのである。耕作面積も他産業も少ない閉鎖的な村で長く培われてきた互酬性が、利益を村民に公平分配するという一見、公平な「平等割」システムを編み出したのである。しかし、テングサ労働に携わってもいない富裕層にも配分することが、公平と言えるであろうか。このシステムを温存させることで一番恩恵を被るのは、13%の富裕層である。つまり、これは「原始共産制」の衣をまとったヒエラルキー支配である。

そしてもう一つ見落としてならないのは、このシステムが「ジェンダー秩序」の上に立脚している点である。海女や改良人夫など、テングサ漁に従事したのは、圧倒的に女性が多い。女性労働者の多い職域の賃金が低水準なことは、現代でも問題にされるが、白浜においても生産者の賃金比率を低く押さえることで^(注8)村の利益率を高めていた。つまり、ジェンダー間分離によるテングサ経営が行われていたため、発言権の低い女性の職域賃金を低く設定することで、永年に渡り労働搾取を続けてこられたのである。もし、白浜で男性が主にテングサ労働に従事していたら、低賃金のままの状態での継続は困難であったのではないかと考える。

また、昭和28年の『テングサ採取に関する取締条例』で、男性の採取や機械器具の使用を制限している。伊豆でも海士が潜っていることを考えると、「男女が共に潜ると経済格差を生むという」理由を付加することで、性別役割分業を強制する「ジェンダー秩序」となっていたと考えられる。つまり、白浜の社会は、ヒエラルキーに基づいた階層支配とともに、女性労働を搾取するという「ジェンダー秩序」が明確に形成されていたのである。

結論

白浜における海女労働の位置付けとジェンダー秩序

本論の目的は、「性支配」を生み出す社会的実践のパターンである「ジェンダー秩序」がどのように構造化されてきたのかを、伊豆白浜を例に解明しようとする

ものである。それにより、白浜の女性労働がなぜ、搾取され続けられなければならなかったのか、また白浜の「ジェンダー秩序」を支えてきたハビトゥスとは何だったのかを明らかにする事である。そこで、本論稿の結論を述べたい。

昭和23年当時の白浜村は、13%の上層階級、73%の中間階級、14%の下層階級に分かれる農村社会であり、漁村社会でなかった。その中で、上層階級の女性は、海女労働をしていなかった。ただし、小遣い稼ぎとして、上層階級に属する女性もテングサ労働に関わっていた。そのことが、村ぐるみでテングサ労働者を搾取する構造を分かりにくくしていた一因でもある。

白浜の海女は婚家の稼ぎ手の一人として、イエの経済力を左右する力を持ち、経済的貢献度の高さは、夫やその家族も認識していた。そのため、「カツギをやると神様みたい」であり、婚家における地位は高く、「家制度にしばられてきた農家女性」(千葉2000:86-123)とは大きく異なる。それは、近代以降、農村からテングサ漁へと移行した白浜独自のイエにおける「女性の地位」であった。

しかし、それは、白浜の女性達が「家父長制」のしほりから逃れていたことを意味するものではない。彼女達が海女労働に従事したのは、経済的要因であると同時に、ムラ社会に根付くジェンダー規範が女性たちに「嫁役割」を強制したと考える。それは「どうしても世間体が悪くて。カツギはやらなくてはならなくなるの」といった、村落社会の中の眼差しが「しほり」となり、ジェンダーハビトゥスとなって、「白浜で務めができれば、どこでも務めができる」と言われるような、「イエのために働く嫁」というジェンダー秩序が形成されていったと考える。

このように、イエのために働くことが白浜の嫁として標準化されていく中で、海女労働はイエのための生産活動であり、ムラから搾取されたという意識は全くない。そこが白浜のテングサ労働における搾取構造の巧妙さである。

一方、白浜村は、テングサ漁をムラがコントロールできる自営方式を採用した。その結果、村落共同体内に様々な「しほり」を作り、「村民合意」という大義名分のもと、テングサ生産者に大きな圧力をかけることになる。余剰利益を村民で分かち合う「平等割」は、一見すると公平な衣をまとっていたが、一番恩恵を被るのは、13%の富裕層という権力者支配であった。

ここで問題は、海女労働をはじめとする女性労働がなぜ、搾取され続けてきたかという点である。理由として、(1)入り会い漁場ゆえの平等分配が結果として女性労働の搾取につながった。(2)上層階級による搾取構造を分かりにくくする

ために、下層階級の救済を大義名分とした。(3)「家父長制」による女性を劣位に置くことを社会的に当然とする考え。(4)社会から規定された「女性規範」「嫁規範」による、ジェンダーハビトゥスが女性自身に受容されていたことなどが白浜村のジェンダー差別構造の背景であったと考えられる。

つまり、白浜村におけるテングサ労働は、ジェンダー秩序による支配と同時に、ヒエラルキー構造による支配という二重支配の下に続けられてきたことは明らかである。そして、「ジェンダー秩序」の構築に加担してきたのが「嫁規範」によるジェンダーハビトゥスであり、イエ間の関係を規定したムラのヒエラルキーであった。また、平等に見えたテングサの利益配分も、実質的には階層の違いによって、不平等に分配されていた。そして、このような、不平等が容易にムラビトに自覚されないための「装置」として作動したのが、白浜の人々が共有する前近代的なムラ意識であり、ジェンダーハビトゥスであった。

注釈

- 1 サンガを核とする仏教的聖俗秩序は、[サンガ内の男性][在家の男性][在家の女性]というヒエラルキーを成立させ、はっきりと女性を劣位の存在としている。もともと「赤不浄の女性」というようなジェンダー差別は仏教の教義上では存在しなかった。ところが、経済的基盤を持たない僧侶たちが「サンガ」を組織し、それを支える王を頂点とする在家仏教集団が誕生する中で、サンガに入ることのできる男性と、入ることのできない女性が聖俗の点で序列化されることになったと結論付けている。(小野澤:1995)
- 2 社会化過程の中で習得され、身に着いた一定のものの見方、感じ方、振る舞い方などを持続的に生み出していく性向のこと。ブルデューは「ハビトゥスとは、持続性をもち、移調が可能な心的諸傾向のシステムであり、構造化する構造として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造である」と述べている。(Bourdieu, 1980=1988:83)
- 3 江原は『ジェンダー秩序』[2001:ii]でジェンダー秩序を「男らしさ」「女らしさ」という意味でのジェンダーと男女間の権力関係である「性支配」を同時に産出していく社会的実践のパターンと定義する。また「性支配」について、「男性」「女性」として社会的に構成された性別を持つ「主体」(ジェンダー化された「主体」)間における「支配—被支配」の関係と、定義づけている。
- 4 上野は「家父長制的戦略とは(1)女性を賃労働から排除すること(2)女性の労働を男性の労働よりも低く位置付け、そこに封じ込めておくこと」と定義している。(上野:1990:58)
大沢は「現代日本は企業経営、労務管理、組合を当事者とする労使関係も家父長制的である」と、企業社会における男性中心のジェンダー関係を「家父長制」の概念で分析している(大沢:1994)
- 5 「近世封建社会における漁業権の原則は“磯漁は地付根付次第也、沖は入会い”となっており、地付の磯漁場は村人の生業の場であるとともに、領主には、貢祖賦課の大事な場であった。藩政時代は領主にアワビを献上していた事からアマは漁業権については御墨付きをもらい保護されていた場合が多い」(田辺:1993)しかし、白浜の場合、テングサが寒天原料として多額の利益を産んだことから、事情が異なったと考えられる。

- 6 白浜村全体で98軒の長前百姓と199軒の小前百姓がいた。長田部落では、長前百姓のうち8軒が、白浜全体ではおよそ30軒近くが名主株を持ち、5反～15反の水田を所有していた。しかし、明治中期以降「井戸端」以外は皆、没落していった。そしてそれらの家に代って上層階級へと台頭していくのが、酒屋、雑貨屋、宿屋といった商人である。酒屋と兼業で高利貸をして財を成した家も多い（潮見1954:48）。
- 7 平等割による村民への配当金額は、昭和初期、大卒の初任給が30圓～35圓の頃、最高で1000圓、例年300圓前後の配当がなされた。（伊豆の天草漁業編纂会1998:80）昭和22年には、1戸当たり18000圓であった。これは、白浜村総戸数552戸中、398戸（72%）である。当時、テングサ生産者が1貫目48圓で村におさめたテングサが、村によって150圓で売られていた。（潮見1954:58）
- 8 海女労働や改良など、女性が携わる労働賃金は他地域よりも低く、昭和13年当時でテングサ採藻価格が妻良の $\frac{1}{3}$ であった。昭和44年度の改良の日当は、白浜が350円、須崎は750円である。

参考文献

- 秋道智弥 1994『なわばりの文化史』小学館
- 阿部善雄 小沼勇1951「社会学評論—漁村の構造 伊豆白浜の場合」『社会学評論』1951年4月号 日本社会学会編
- 伊豆の天草漁業編纂会 1998『伊豆の天草漁業』成山堂書店
- 上野千鶴子 1990『家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店
- 江原由美子 2001『ジェンダー秩序』勁草書房
- 小野澤正喜 1995「タイ社会における聖なるものと女性の地位」『洗練と粗野:社会を律する価値』清水昭俊編 東京大学出版会
- Bourdieu, Pierre 1980 *QUESTIONS DE SOCIOLOGIE*, Edition de Minuit=1991（『社会学の社会学』：田原音和監訳：藤原書店）
- Connell, R.W, 1987, *Gender and Power: Society, the Person and Sexual Politics* —（『ジェンダーと権力—セクシュアリティの政治学』：森重雄、菊池英治他訳：三交社）
- David W. Plath 1991 *Lessons From the Ama* University of Illinois at Urbana-Champaign CENTER FOR EDUCATIONAL MEDIA
- 加茂郡白浜村 1936『白浜村心太草採収ノ顛末概要』明治8年～昭和16年『白浜村沿革誌』明治3年～大正6年『白浜村天草沿革』1954『天草の沿革』
- 鎌田とし子 矢澤澄子 木本喜美子編 1999『講座社会学14 ジェンダー』東京大学出版会
- 小沼勇 1988『漁業政策100年 その経済史的考察』農山漁村文化協会
- 潮見俊隆 1954『漁村の構造—漁業権の法社会学的研究—』岩波書店
- 袖井孝子編 1987「女性の地位とは何か」『現代女性の地位』勁草書房
- 高桑守史 1994『日本漁民社会論考 民俗学的研究』東京：未来社
- 田中雅一 1995「スリランカ漁民社会のジェンダー」『コモングの海』学陽書房
- 田辺 悟 1993『ものと人間の文化史73海女』法政大学出版局
- 千葉悦子 2000「農家女性労働の再検討」『現代日本の女性労働とジェンダー』木本喜美子 深澤和子編著 ミネルヴァ書房
- Christine Delphy, 1981, *The unhappy marriage of Marxism and feminism*=1996（『なにが女性の主要な敵なのか』：井上たか子他訳：勁草書房）
- 名古屋地方職業紹介事務局 1934『「海女」労働事情 三重懸志摩半島』
- ハイジ・ハートマン 1991『マルクス主義とフェミニズムの不幸な結婚』勁草書房
- 橋本健二 2001『階級社会日本』青木書店
- 原純輔 2000『日本の階層システム1 近代化と社会階層』東京大学出版会